

ラッセル・アインシュタイン宣言と湯川博士 元京都大学理学部教授 田中 正

核兵器の出現による人類の存続の危機を世界に訴える「ラッセル・アインシュタイン宣言」（1955 7/9, ロンドン）が出てちょうど 50 年が経ちました。この宣言がもとになって、1957 年カナダのノヴァ・スコシアの小さな漁村、パグウォッシュで、世界各国から集った科学者たちがどうしたら科学と技術が社会で悪用されないように防止できるか、どのようにして核兵器をこの世から廃絶し、戦争をなくすことが出来るかが真剣に討論され、今日のパグウォッシュ会議（Conference on Science and World Affairs）の活動に繋がっています。この宣言に日本人として参加した湯川秀樹博士（1907-81）について、そして同宣言の今日的意義などについて考えたいと思います。実際湯川博士が生前くり返し指摘されたように、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神は、戦争を放棄した日本の憲法九条の歴史的意義と深く結びついています。

この問題を考える上で重要な背景として、湯川博士とアインシュタインの出会いがあります。まずこの署名時をはるか遡る 1939 年のごく短い出会いと、1948 年の一年にわたるプリンストン研究所での交流です。とくに後者はそれまで研究ひとすじの湯川博士に大きな影響（政治的スタンスにも）を与えたのではないかと推測されます（湯川「アインシュタインと私」アインシュタイン選集 3、共立出版、所収）。つまりこの年（1948 年）はアインシュタインの国連総会への公開状（1947 年、アインシュタイン『晩年に想う』、講談社文庫参照）に端を発して、「全滅を回避しようとする目的は、他のいかなる目的にも優先しなければなりません」（いわゆるアインシュタインの原則）と「世界政府」をめぐって、アインシュタインが旧ソビエトの科学者と厳しいやりとりをしていた時期にあたり、同じころプリンストンを訪れた湯川博士とも「日本への原爆投下」の問題とともにおそらくこのことが話題になり、世界の平和について真剣な会話がかわされたものと思います。（世界の平和に生涯心血を注いだアインシュタインの思想と行動については、『アインシュタイン平和書簡』、みすず書房参照）

さらに宣言時（1955 年）の博士を直接知る上で重要なできごととして、その前年（1954 年）3 月 1 日のビキニ（水爆実験）事件があります。それはノーベル賞受賞（1949 年）から数年後、米国から帰国された翌年ですが、湯川博士は 3 月 31 日づけの『毎日新聞』に「原子力と人類の転機」の一文を寄稿されています。そこには被爆国の日本人、科学者、そして人類の一員として、上にふれた「アインシュタインの原則」をさらに深める厳しい思索の跡が読み取れます。（湯川秀樹著作集 5『平和への希求』、岩波書店）

現存する湯川史料（YHAL-E31）によれば、ラッセルから湯川博士への署名要請の手紙は、1955 年 4 月 5 日付、応諾の返書は 4 月 19 日、アインシュタインの死去の翌日です。湯川博士の返書を、末尾に掲げておきます。これらの参考資料に触れながら、急速にすすむ現代の科学、押し寄せるテクノロジーの明と暗、そして世界の平和、わが国の行く末について、皆さんと一緒に考えることが出来れば、と考えています。

Dear Lord Russell:

I appreciate your great effort for the cause of benefit of mankind. I am willing to sign your statement.

I have just got a very sad news of the death of Professor Einstein who had been so very influential in arousing the conscience of both scientists and non-scientists all over the world. We take it our duty to make an effort all the more eagerly in order to achieve the ideal which he cherished in common with you and to which we subscribe.

Yours sincerely,

Hideki Yukawa